

日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol.20 2020 年 4 月 1日

巻頭語

変化の時・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 鮫島 有理

会長メッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 井上 ウィマラ

第11回学術大会より

1. 報告：上智大学での日本仏教心理学会学術大会・・ 葛西 賢太

2. 第11回大会実行委員長を終えて・・・・・・・・・・・・ 松永 博子

3. 第11回日本仏教心理学会学術大会に参加して・・ 仁田 公子

4. 第11回日本仏教心理学会学術大会で発表して・・ 岡田 成能

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 千石 真理 ・ 松村 一生

巻 頭 語

変 化 の 時

人間総合科学大学 鮫島 有理

2019年は目まぐるしく変化の起きた年であったように思う。元号が5月に平成から令和に変わり、10月には消費税が8%から10%に上がった。自然災害も多く、大型台風によって公共交通機関が始発から運休される「計画運休」は流行語にもなった。12月には中国・武漢に端を発した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が発生し、今も全世界を恐怖に陥れている。

2020年も、2019年以上に大きな変化を感じさせる出来事が多い。この原稿を書いている今、まだ東京五輪の中止、延期等は決まっていないが、新型コロナウイルスの世界的蔓延を考えると、予定通りの開催を危ぶむ声が大きくなっている。

かくいう私自身にも大きな変化があった。長年、心理臨床の現場を掛け持ちしていたが、2020年4月から人間総合科学大学大学院の臨床心理学専攻にて大学教員をさせていただくことになった。通信制の大学院で、臨床心理士、公認心理師の資格取得を目指す学生の指導にあたる。自分に後進を育てることができるのだろうかと思うと同時に、もう自分も後進を育てる年齢になったのだという思いがする。今一番の気掛かりは、自宅から大学のある埼玉県蓮田まで片道2時間かかることである。遠距離通勤、通学をされている方も多いと思うが、自分にそれができるのか…というのが目下の心配事となっている。

思い返してみると、18歳で大学に入った時から大学や大学院に在籍している年数が22年間にもなっていた。その間に、結婚出産等をはさんでいるので、通算の年数にはなるが。最初に学部に入ったのは獣医学科であった。結局、獣医師免許は取らずに卒業したが、当時、大学附属の家畜病院（当時はこう呼んでいた）に来る飼い主やペットを見ていて、「犬猫の体を治しても、人間の心を治さないと根本的な解決

にはならない」と思ったのが、臨床心理士を目指すきっかけとなったような気がする。仏教に関心をもったきっかけは、小学校の時にさかのぼる。小学校が大乗仏教系の学校で、4月8日には、天上天下唯我独尊のポーズをとった赤子の釈尊像に甘茶をかけていたことを覚えている。何かの行事の際には、「♪人身受け難し～今すでに受く～仏法聞き難し～♪」と意味もよくわからないまま歌っていた。それ以外は、仏教教育のようなものはなかったと思うが、その後、改めてきちんと仏教を学びたいと大学の門を叩くことになったのは、この時の記憶が少なからず影響しているであろう。

心理臨床の現場にいと、仏教の教えが有用であろうというクライアントに出会うことは多い。臨床心理士の立場で、仏教の教えを伝えることは憚られるため、そのまま教えについて話すことはないが、いつの時代も人間の持つ苦しみは変わらないのかもしれない。どのように結実するかはまだわからないが、臨床心理学の立場から初期仏教を研究し、釈尊の対機説法を深く知りたいと思っている。会員諸氏が日本仏教心理学会に入会されようと思ったきっかけは皆さんそれぞれであると思うが、学会が各人の思いを受け止めるものになればと思う。

新型コロナウイルスの影響がどこまで続くかわからないが、今年の学術大会は、私が社会人になってから10年以上在籍させていただいた母校、東洋大学で行われる予定である。大会長は、博士前期課程で指導教授としてお世話になった渡辺章悟先生にお願いしている。

東洋大学は、1887年に井上円了によって創設された私立哲学館が前身となって設立された大学である。井上円了は「妖怪学」で有名であるが、仏教に関する著作も多く、また「心理療法」などの心理学についての著作も著している。明治30年には『仏教心理学』も著しており、仏教にも心理学にも縁が深い大学である。

2020年9月26日（土）東洋大学（白山キャンパス）にて第12回学術大会が無事開

催され、大勢の方にご参加いただけることを願っている。

会長メッセージ

健康科学大学 井上 ウィマラ

みなさま、新型コロナウイルス感染症騒動で大変な思いをされていることと思います。私も、子どもたちの休校に伴い、研究室に子どもを連れて出勤したりしながらなんとかやりくりしている最中です。実は、このようなタイミングでこの原稿を書くことになったのは、千石先生からの原稿依頼をすっかり忘れてしまっていたために督促メールを頂いたからなのですが、このようなタイミングでしか書けないこともあるかと思い、「会長メッセージ」というタイトルで書かせていただくことにしました。

今回のパンデミックに関して、その発生源やこれまでの対応や報道のあり様についてはいろいろと思うこともありますが、これといった特效薬もない状況の中でできること、すべきことは何かを考えてみました。それは、適度な感染予防をしながら、自分の免疫力を信じ、家族のレジリエンスが最大限に発揮できるような環境を整え、氾濫する報道や過度な不安に左右されることのない生き方を子どもたちと一緒に見つけ出してゆくことに全力を注ごうということです。

感染症学会が出した「現状と対策：水際作戦から感染蔓延期に移行するときの注意点」の中では、目指す方向性として「1. 重症例の“いのち”を守る、2. 軽症例の集中による現場混乱の回避、3. 感染患者に対する差別が生じないように」の3点を挙げています。私はこれに第4の方向性として、「自己治癒力を最大限に生かすための自分に合った生き方を見つけ出す」ことを入れてみたいと思います。

我が家では、妻が医療職をしているので新型ウィルスの情報や感染予防に関する話を分かりやすくしてくれます。それに添えて、私からは「人はいつか死ぬのだし、

いつどのように死んでゆくかは誰にもわからない。コロナで死ぬかもしれないし、交通事故で死んでしまうかもしれない…。だから自分の生きる力を信じて、生きる力を最大限に発揮できるように頑張って、いつ死んでもいいように今日を精いっぱい生きよう」というメッセージを伝えるようにしています。これは「死念(maraṇa-sati)」という瞑想修行の私なりの日常版です。

超高齢化・超大量死時代に備えて「人生の最終段階における医療の決定プロセスについてのガイドライン」(厚生労働省)が2018年に改訂され、アドバンス・ケア・プランニング(ACP)が積極的に活用されるように勧められるようになりました。自分は最後までどのように生きてゆきたいか、どのように最後の時間を過ごしたいのかを家族や支援してくれる医療・福祉の人たちなどとも積極的に話し合っただけで考えるようにしてゆきましょうという流れです。ちなみに私は、子どもたちに自分が死にたい場所と、どのようにして死んでいきたいかについて詳しく話してあります。そしてそうした話の最後は、「でもねえ…、そんな死に方ができるかわからないし、そういう死に方ができなくても父ちゃんはお前たちに出会えただけで幸せだし、どうでもいいかもしれないけれど、念のために話しておくね」と結ぶように心がけています。

息子は、子ども新聞でスペイン風邪やペストの記事を読みながら、若者が多く亡くなったために戦争が早く終結し、農奴が減ってしまったので農園主がお金をちゃんと払って働いてもらうようになったことなど、結果としてよいこともあったということを見つけ出して報告してくれました。今回のコロナ騒動でも、フレックス出勤、テレワーク、テレスクールやホームスクールなど新しい生き方が見いだされてゆくかもしれません。マスクなどの買い占めに関しては、石油ショックの時のトイレットペーパーの買い占めなどの情報を歴史本から探し出してきたので、なんでそんなことになるのか、どのようにして防いだ例があったのか、そうした集団心理

に巻き込まれないためには何が大切かなどについても家族で話し合っています。適度な運動も大切ですから、天候とタイミングを見計らって子どもたちと自転車で外出しています。私はマウンテンバイクが好きで、近くの川べりにちょうどいいバンクがあるので、そこで上り下りを使った乗り方を見せてあげました。子どもたちも負けずと頑張ります。一番驚いたのが、最初は怖がっていた娘が「楽しい」と言っただけの直滑降に挑戦するようになり、みんなの楽しみになってしまったことです。一人ひとりバンクを使ったパフォーマンスを披露し、誰かが実況中継と解説をして、ゴールしたらハイタッチしてお互いの努力を祝福します。長距離走に興味を持ち始めた息子が、妹の自転車を走りながら追いかけてしまうのには脱帽しました。

私にとってはこんな家族とのやり取りのひとつ一つがマインドフルネス瞑想の大切な場面なのであり、そのために還俗して家庭を持ったようなものだと思っています。時には夫婦喧嘩や親子喧嘩もありますが、それぞれの「私」が破裂してしまった後で仲直りするまでを丁寧にやりきることがマインドフルネス実践のコツだと思います。誰も独裁者になれない平等な関係性の中での家庭生活ほど厳しい道場はないと思いますし、瞑想修行の仕上げにはぴったりの場なのではないかと思います。そんな私にとっての仏教心理学は、2600年前のブッダの教えがいかに現代社会の中で実践するにふさわしいものであるかを説明するための重要な伝達媒体です。昨今のマインドフルネスブームは脳科学を中心とした科学的なアプローチに裏打ちされたものになっていますが、経典と仏教心理学に基づいたマインドフルネスの解釈は、そうした流行になってしまったマインドフルネスに「生まれること、成長すること、死んでゆくこと、看取ること、悲しむこと、そして悲しみを通して生きる力と育む力を培うこと」という厚みを与えてくれるはずです。

それを学術的に説明してゆくための作業の一つとして、私は数年前から『律蔵』に

記述された出家修行者たちの相互看病や看取りの実践について紹介する論文 i を書いてきました。マインドフルネスの実践は出家修行者同士の相互ケアによって学ばれていたという新たな知見を提供するためのものです。そしてそこでは、アメリカの医療人類学者であり禅の老師でもあるジョアン・ハリファックスが考案した医療者の燃えつき予防プログラム G. R. A. C. E. についても紹介しています ii。これは、

G: gathering attention. 注意を集中する。

R: recalling intention. 意図を思い出す。

A: attuning to self then others. まずは自分にチューニングし、その後で他者に調律する。

C: considering what serves best. 何が一番役に立つかを熟慮する。

E: engage, enact and end. 関わり、為すべきことを行い、終結する。

という5つの実践ステップの頭文字をとったものになっています。

私は GRACE の日本版として「思いやり」という実践を薦めてゆきたいと思っています。

お：落ち着いて

も：もともと何のためにこれをやりたいと思ったのかを思い出そう。

い：最初に自分のことを心配して、そのあとで他人のことを心配しても遅くはない。

や：やりたいことより、その場で何が一番必要かを考えてみよう。

り：凜として行動したら、完璧を求めすぎずに、次に備えよう。

このプログラムの中核は、いつも他人の心配をすることばかり教えられてきた医療関係者や対人援助職たちに、自分自身を心配することから始めた方がいいのだという新しいパラダイムを身に付けてもらうことであり、その際に自分の呼吸を中心とする身体感覚に注意を集中して心を落ち着けることから始めることを提案するとこ

ろにあります。

ブッダの教えはいろいろな仕方で現代社会の中で実践することが可能だと思います。仏教心理学会はそうした仏教の再構築のためのプラットフォームとして活動を続けてゆくことが必要なのではないかと思っています。ケネス田中先生から会長を引き継がせていただいて3年目になります。微力ではありますが、私なりの仕方で頑張っ、次に渡してゆけたらと思っています。

最後に宣伝になりますが、前任校でスピリチュアルケアの構築にかかわりながら10年間に渡って書き続けた「スピリチュアルケア講座」という連載が『子育てから看取りまでの臨床スピリチュアルケア』（興山舎）という本になりましたので紹介させていただきます。冒頭で紹介したような家族とのやり取りを含めて、私なりの仕方で仏教瞑想と心理療法を統合したケアのあり方を探求し、その理論的整備と具体的な援助法の開発を工夫してきた経緯について書いたものです。みなさんが仏教心理学の具体的な可能性を考えるための参考にしていただければ幸いです。

i 2016 井上ウィマラ 「マインドフルネスの歴史的背景とその射程」 日本仏教学会年報 第81号 pp. 94-122. 日本仏教学会 2017 井上ウィマラ 「律蔵における看護実践から医療者の燃えつき防止プログラム G. R. A. C. E. へ」 『パーリ学仏教文化学』第31号 pp. 73-88. パーリ学仏教文化学会 ii 2015 ジョアン・ハリファックス 『死にゆく人ともにあること：マインドフルネスによる終末期ケア』 井上ウィマラ 監訳 春秋社

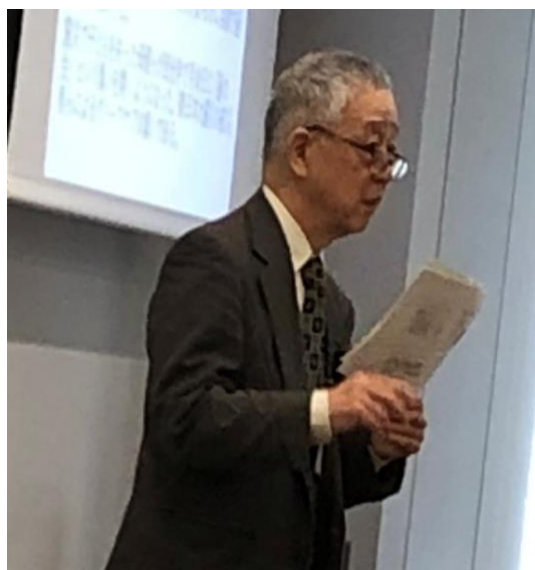
第 11 回 学 術 大 会 よ り

報告：上智大学での日本仏教心理学会学術大会

上智大学グリーンケア研究所
特任准教授 葛西賢太

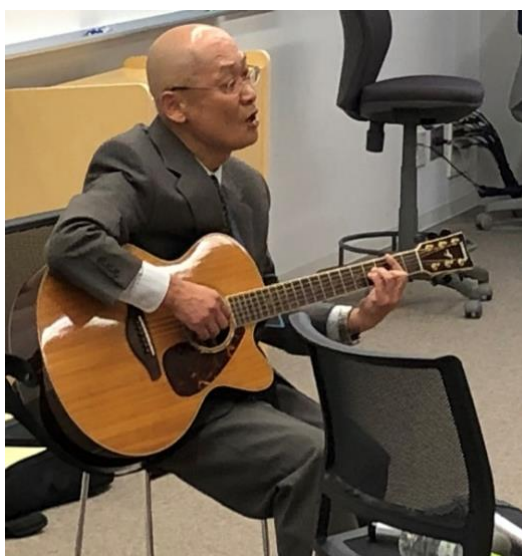
2019年10月27日、学術大会が上智大学四谷キャンパスにて行われました。ご存じの通り、上智大学はイエズス会が設立したカトリックの大学です。学会の一ヶ月後には、ローマ教皇フランシスコが、仏教心理学会を行ったのと同じ建物を訪れて、講演をしています。ここで仏教心理学会が開かれること、特別の思いがありました。

公開基調講演は、上智大学グリーンケア研究所所長の島菌進先生がお引き受けくださいました。日本人の経験してきた悲哀、それを表現する文学の例を味わいながら、その中に仏教的な思想を確認していく内容のご講演でした。講演の冒頭でも語られたのですが、お釈迦様とほぼ入れ替わりにお母様の摩耶夫人が亡くなられた、そのグリーンを種として仏教は生まれてきた、ともいえます。公開基調講演にあわせて、井上ウィマラ本学会会長と、大会長の葛西との三名での鼎談がこれに続きました。基調講演とそのあとの鼎談の内容を一貫したものにしたい、と企画者としては思っていました。井上会長がギターをつま弾きながら仏教精神を表現した歌を披露し、それに触発されるように、音楽によって作り出される宗教的な語り合い分かち合いの場について、そして、私たちが悲しみの記憶をどのように共有するかについて、語り合う、あたたかい雰囲気になりました。



悲しみを分かち合う場が仏教によって
つくられる ・

島藺進先生 講演



仏教を歌に表現・井上ウィマラ先生

当日の個人発表は多様性にあふれたそれぞれ興味深い内容でした。プログラムおよび抄録が学会公式サイトに公開されていますので、どうぞご覧ください。

また、総会では、今後の学会のあり方について、これまでの経緯を踏まえながら、大切な議論が行われました。学会としての知的な専門性の充実を心がけつつも、多くの市井の人にかかれた場を大切にしたい、という基本方針が確認されまし

た。

今回、懇親会は、立席ではなく、大学近くのインド料理の名店でカレーディナーを囲んで同じテーブルに坐ってじっくり話し込む形にいたしました（ここのチキンカレーは辛くて絶品です）。発表者やスタッフ、次の学会を受け持たれる東洋大の渡辺章悟先生、島藺先生も加われ、お互いに自己紹介や仏教心理学への思いを語った、距離感を一気に縮めたあたたかい場になりました。



おいしいカレーを囲みながら、そして島藺先生と渡辺先生を囲みながらの懇親会

島藺先生は分科会にも参加下さいました。悲しみをともに味わう場を、仏教が作り出してくれることなど語りあい、懐かしい先生方と楽しい時間を過ごされた、そして女性がんばっている活気ある学会だったと、後日、島藺先生はおっしゃっていたことを、嬉しい気持ちで報告いたします。

個人的には、9月にも「日本スピリチュアルケア学会」を主催したこともあり、緊張が抜けませんでした。実行委員の先生方がやるべきことを明確にしておいてくださったおかげで、そして当日の司会や受付や書籍の販売などを皆さんで温かい雰囲気でしたいただき、ありがたい時間でした。

きたる東洋大学での学術大会も、多くの方が参加されて充実したものになれば、と祈念いたします。皆さんのお力をぜひお貸し下さい。

最後に一つだけ。かつて鶴見大学で学術大会をお引き受け下さいましたときの、副学長・名誉教授の前田伸子先生が、2020年1月28日にご逝去されました。今回の学術大会も、ご闘病中ということでお越し頂くことができませんでした。前田先生は歯学（口腔微生物学）の専門家でありながら、晩年は、鶴見大学の設立母体である曹洞宗大本山・諸嶽山總持寺とのご縁の中で、若い雲水を臨床宗教師として育てるプログラムにご尽力されていきました。前田伸子先生のご冥福をお祈りして、この報告を締めくくらせていただきたいと思います。

日本仏教心理学会第11回大会実行委員長を終えて

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
自殺総合対策推進センター研究員 松永 博子

日本仏教心理学会第11回大会が、上智大学において10月17日（日）に行われました。毎年、12月の寒い時期に行われていた大会ですが、本年度は紅葉の秋となり、大会実行委員としては、例年よりも早く準備にとりかかり、いつもよりも時間に追われつつ、大会当日を迎えました。どうにか無事に終了できたことをうれしく思い、また安堵しております。大会の内容につきましては、大会長の葛西賢太先生からご報告があると思いますので、私からは割愛とさせていただきます。

今回の参加者は、ご登壇下さる先生方や実行委員を除いて、基調講演・鼎談の参加者が43名、大会参加者が28名となりました。特に、基調講演・鼎談の際には、島藺進先生から頂いた発表資料が不足するという事態となり、慌てて追加の資料を用意するという嬉しいハプニングがおきました。

個人発表は、4名の方からの研究発表となりました。例年、個人発表への演題登録数が多くなく、もっと多くの個人発表者が応募して下さるのを願っています。そこで、来年度より多くの方に発表をしていただくために、個人発表の演題につきまして解説をさせていただきます。文献研究の場合は、①研究の背景と目的、②研究の概要と結果、③考察（+④結論）といった構成で準備して下さるのがよろしいかと思います。実証研究の場合は、①研究の背景と目的、②方法、③結果、④考察（+⑤結論）という構成で準備して下さるとよろしいかと思います。実証研究の際には、対象者への倫理的配慮につきまして、明記をお願いいたします。その上で、演題登録の際には、投稿規定をご確認頂き、規定に沿った記述をして下さいますようお願いいたします。以上をどうか目安として、皆様の研究を多くの方に紹介して下さることをお待ちしております。

最後に、大会長である上智大学の葛西賢太先生をはじめ、実行委員をお引き受けくださいました井上ウィマラ先生、鮫島有理先生、井川裕覚先生、菅原耀先生、渡邊美由紀先生、常世田朋子先生に心より御礼申し上げます。

来年度の大会は、東洋大学に於いて2020年9月26日（土）を予定しております。本年度より1か月早い開催となりますが、どうか皆様のご予定に今から入れていただき、当日お目にかかれますのを願ってやみません。その日まで、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



第11回日本仏教心理学会学術大会に参加して

青山心理臨床教育センター

臨床心理士・公認心理師 仁田 公子

2019年4月から仏教伝道協会主催の、「仏教を初歩英語で学ぶ会」に参加していた関係で、ケネス・田中先生から、仏教心理学会への参加のお声がけをいただき、続いて7月の内観学会でたまたまお隣の席にいらした千石真理先生からも、重ねてお誘いを受けたことがきっかけとなり、ご縁の深さを感じて、学会に参加させていただくことになりました。

筆者は、「内観」と「フォーカシング」を軸とする心理療法を実践しておりますが、仏教の「施無畏」の心を、クライアントさんとの関係において忘れないように、という今は亡き恩師からの教えを大切にして仕事をしてまいりました。また、ここ数年は仏教の学びを深めつつあるので、どのようなお話が拝聴できるか、大変楽しみにしておりました。

さて、今回の大会テーマは「仏教心理とグリーフケア」でした。島菌進先生による基調講演「救い・癒し・悲嘆—仏教における悲」では、明恵のことば、小林一茶、宮沢賢治、金子みすゞの作品などを紹介しながら、仏教の「諸行無常」という教えにより、死別の悲しみを深く受け止め、乗り越えようとした日本人の心性が語られました。新美南吉の童話、「でんでんむしのかなしみ」と仏典の「キサーゴータミー」逸話のつながりや、哲学者、西田幾多郎の思想の背景にあった肉親との死別の悲しみのことも、印象に残りました。また、20世紀末以降は「ふつうの市民がグリーフケアケアを身近に感じ、“ともに悲嘆を生きる”在り方を探るようになり、仏教の再発見がなされているとのお話に宗教と人との新しい関係の兆しも感じることができました。

東北の大震災関連の支援については、「悲嘆に暮れる心を癒すことが大切。そこに

宗教の壁はない』という『挽歌の宛先』（河北新報編集局）からの引用に、深い共感を覚えました。ここ数年は、大規模で予測不能な災害の発生や、最新の医学技術でも治療困難なさまざまな疾病の増加など、自然科学万能の思想の限界を感じる人が増え、「スピリチュアル」なものに関心が集まりやすくなりました。今の時代は、宗派・宗教の壁を越えて人を幸せにすることに力を注がなければならない時代です。超宗派で宗教的なたましいの救済の心理実践について、智慧を結集できる場が必要とされています。本学会にも、多くの支援の専門家が集えるような、よりオープンな場となることを期待したいと思いました。

島菌先生に続いて登壇された、井上ウィマラ先生（健康科学大学）の鼎談「悲しみと思いやり」では、仏教の慈悲を表現する井上先生の自作の歌が披露されました。先生のやさしい慈愛に満ちた歌声に心が温かくなりました。また、援助する側として、自分の内側にある悲しみ等、自らの感情としっかり向き合っていくことの大切さを感じました。

午後からの個人発表では、マズローの至高体験と唯識の悟りの体験を比較する近藤伸介先生の発表から新鮮な視点をいただき、学生時代に学んだマズローの人間性心理学をもう一度学んでみようと思いました。続くケネス田中先生の発表では、浄土真宗の「念想」と「内観」を組み合わせた瞑想の実践が紹介されました。目に見えない「阿弥陀仏の光明」とのつながりを実感できる実践には、自分自身の集中内観の体験につながるものを感じ、機会があれば体験してみたいと思いました。

最後の分科会は、「カウンセリング、心理療法」のグループに参加させていただきました。参加なさったほかのメンバーと、日ごろの臨床実践について情報交換させていただきました、短いながらも有意義なひとときを過ごすことができました。

最後になりましたが、運営に携わったスタッフの皆様に、こころより感謝申し上げます。

第11回日本仏教心理学会学術大会で発表して

スリランカの仏教日曜学校が内包する対立感情抑制の可能性

同志社大学大学院 総合政策科学研究科
博士課程・後期課程 岡田 成能

1. はじめに

この度は日本仏教心理学会第11回学術大会という貴重な場をお借りし、「スリランカの仏教日曜学校が内包する対立感情抑制の可能性」の報告をさせて頂いた。報告者は自身の仕事として仏教に携わる一方、大学院にて民族紛争の研究を進める学生でもある。スリランカは報告者にとって興味の十字路であり、更に2019年3月に初めて現地を訪問し多くの知見を得る事ができたので、今回報告させて頂いた。

2. 報告内容

①スリランカにおける民族と内戦の概観

スリランカでは、仏教徒でシンハラ語を話し全人口の約7割を占めるシンハラ人と、ヒンドゥー教徒でタミル語を話す2割弱のタミル人が、言語を対立原因とした26年に渡る内戦を繰り広げた。

イギリス統治下では英語話者が政治的・経済的特権階級を形成したため、独立後も言語が政治的資源化する事が予想された為、政治リーダーは自民族の言語を公用語とするべく政治運動を展開した。少数派のタミル人はタミル語を公用語化すべく運動を展開する一方、多数派のシンハラ人はタミル語を公用語から排除し、シンハラ語のみを登用するシンハラ・オンリー政策を行ったため、一部のタミル人が武装化し内戦へと至った。

②対立感情抑制の可能性を育むスリランカの日曜仏教学校

民族紛争の和解は世界的に困難を極め、2009年に終結したスリランカ内戦も和解は進んでいない。しかし、スリランカには思想的・実践的資源としての仏教が存在する為、将来的な再激化を防ぎ、平和構築を堅固に進められる可能性を報告者は考える。その実践の一つが、仏教日曜学校である。

スリランカでは、義務教育期間中の各日曜日に児童が任意で参加できる仏教日曜学校が各地の仏教施設などで開設され、仏教法要の基本的作法の習得から仏教説話の学習や瞑想の実践まで、政府による無償提供の教材を使った体系化された仏教教育が実施されている。

ここで仏教の基礎を学んだ児童は、義務教育で学ぶ生活や経済活動において必須な知識の他、仏教的価値観を自身に植え付け成長する為、本来仏教思想が持つ対立感情を抑制する機能が働くのではないかと考えた。

例えば、諸法無我は根本的に他民族を想像しない思考であり、三毒や四聖諦も対立を俯瞰的に眺める基本となる。報告者は、このような対立感情そのものを抑制する仏教の機能は、政治リーダーによる煽動に対する眼差しや投票等の政治行動、実生活における対立緩和に効果を発揮する可能性があるのでは、と考える。

尤も、仏教日曜学校は内戦の当事者である政府の援助による為に監視・操作され易いという面や仏教をナショナリズムに繋げる動きも存在するという懸念もあるが、民衆レベルでの自発的な対立抑制の実現は、政治的力学中心の現在の平和構築分野に対して一石を投じる可能性があるとも考えられる。

3. 質疑応答

質疑応答では、本報告をさらに深掘りするような質問が寄せられた。

まず葛西先生より、民族紛争を抱える国家の下での仏教教育は却って児童の葛藤を

増大させてしまうのでは、というご指摘を頂いた。まさにご指摘の通りで、現在も政府によりシンハラ・ナショナリズムに仏教が動員され、歴史教育にも力が注がれる為、対立を抑制する仏教思想と対立感情を煽るナショナリズムが葛藤を産む可能性も十分に存在する。しかし実際に教鞭を執るのは僧侶や仏教に詳しい優婆塞等のボランティアである為、ナショナリズムの影響が教育現場にまで浸透するかどうかは講師に裁量が一定程度ある。

次に千石先生からは、仏教思想による平和教育の実践についてご質問頂いた。報告者はスリランカの平和教育の実態について知識が無く、明確なお答えはできなかったが、内戦が政府側の勝利で終結し、勝者の論理で戦後教育を進めることも可能な中で、仏教思想の浸透はその行き過ぎを防止する事に貢献できるかもしれない。

最後に太田先生からは、スリランカの仏教徒とその社会に仏教的な気質が流れているのかというご質問を頂いた。これに対しては現地訪問時に報告者自身が抱いたイメージによる回答になってしまうが、人々の生活や親切心、穏やかさに触れると、やはり仏教思想を背景としたメンタリティが形成されている実感があったように思う。

会場にはスリランカにお詳しい先生方が多く、質疑応答以外の場でも多くのご質問やご助言を賜った。

4. 謝辞

本学術大会を企画・運営して下さった先生方、関係者の皆様、またご質問・ご助言を戴いた先生方や参加者の方々に感謝を申し上げます。そして、本発表の機会を与えてくださり、大きく背中を押して下さったケネス田中先生に、深く御礼を申し上げます。

編集後記

世界中がコロナウイルスに翻弄されています。私が仏教心理等を教えている大阪学院大学の国際センターでは、多くの留学生が祖国に呼び戻されました。9年前のこの時期には東日本大震災の影響による放射能汚染を心配して、留学生たちに同じことが起きました。ウイルスや放射能は肉眼で見えませんが、私たちの命を脅かすものとして恐怖を感じずにはられません。一方で、空気や、太陽エネルギー、重力も目には見えません。これらなしでは私たちは生きられないのに、その存在すら忘れていないことがあるのではないのでしょうか。他人からの愛情や恩恵も含め、眼に見えないものに対する認識を深めることによって、ウイルスや放射能に対する向き合い方も、変わるかもしれません。

千石 真理 (心身めざめ内観センター)

コロナウイルス感染を警戒して、外出自粛・休校が呼びかけられ、産業界では、テレワークやオフピーク通勤が推奨されるようになりました。期せずして、先の「働き方改革」で積み残しとなっていた課題に、否応もなく向き合わされた形となっているようです。この新たな取り組みは、勤労者のストレス要因のひとつである対人関係（セクハラ・パワハラ等）からの解放を一部でもたらした半面、コミュニケーション不足によるトラブルや、報告に関するストレス、家事や育児や介護との両立を一層要求される等の新たな問題をも提起しているようです。心理臨床は、まさしく生老病死に関わることだという事を、このパンデミックは私たちに突き付けているようです。

松村 一生 (シニア産業カウンセラー)